

漢字圏学習者の文法テストと読解テスト得点の 非対称性の検証

— 読解問題の検証を通して —

齊藤信浩*・菊池富美子**・山田明子***

(e-mail : nsaito88@isc.kyushu-u.ac.jp*・

kikuchi@isc.kyushu-u.ac.jp**・yamada@isc.kyushu-u.ac.jp***)

目 次

1.はじめに	4.各読解文の項目分析
2.調査方法	4.1.読解テスト全体の検討
2.1. 被験者と調査概要	4.2.項目の検討
2.2. テスト内容	4.2.1 分析の視点
2.3. 被験者のレベル分け	4.2.2 漢字圏学習者の方が得点が高 かった問題
3.調査結果	5.総括
3.1. 下位群における文法と読解の関係	
3.2. 中位群における文法と読解の関係	
3.3. 上位群における文法と読解の関係	

1. はじめに

日本語学習者はその母語の漢字能力を基準に、非漢字圏学習者、準漢字圏学習者、漢字圏学習者に大別される(小森2010、加納他2011)。非漢字圏学習者は、英語やインドネシア語等の漢字語彙も漢字も使用しない言語圏の母語話者を指している。準漢字圏学習者は漢字を常用としないが、母語に漢字語彙を有する言語の話者で、主に

* 九州大学留学生センター、講師、第二言語習得

** 九州大学留学生センター、助教、日本語教育

*** 九州大学留学生センター、助教、日本語教育

大韓民国出身の韓国語母語話者を指している。そして、漢字圏学習者は中国大陸や台湾などの漢字を常用としている中国語を母語とする学習者を指している。本学留学生センターが開講する日本語クラスにも、漢字圏学習者が約5割いる。レベル分けにはプレースメントテストを使用しているが、特に、漢字圏学習者の読解能力をより適切に測定することが課題となっている。

漢字圏学習者の日本語文読解時の情報処理特性について実験したものに、鴻巣他(1999)がある。この実験によれば、中国語を母語とする日本語学習者は、日本語母語話者に比べ、読解過程における眼球運動の注視点が漢字に集中する傾向がある。これは、漢字圏学習者が漢字に頼りながら逐語的に情報処理をしている可能性があることを示している。このことから、非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の母語別の日本語学習者を比較した際に、漢字圏学習者はその文法能力以上に漢字語彙を中心とした語彙能力によって、漢字仮名混じりの日本語文の読解を有利に進めているのではないかと予測される。

そこで、本研究では、過去に実施したプレースメントテストの結果をもとに、文法テストの得点を平準化し、同一の文法の得点に対して、聴解の得点と読解の得点に差があるのかを検証する。また、その結果、差の見られた読解問題の内容を検討し、読解問題のうちのどの要素が漢字圏学習者の読解の得点力に影響しているのかを分析した。

2. 調査方法

2.1. 被験者と調査概要

被験者は福岡県内の大学に在籍する193名の日本語学習者で、レベルは初級から中上級まで様々である。うち、漢字圏学習者が129名、準漢字圏学習者が19名、非漢字圏学習者が45名であった。分析対象とするプレースメントテストは、2010年9月に実施したものである。文法テスト30分、読解テスト45分、聴解テスト50分の時間配分で、四肢選択の形式で、1問1点の配点のテストであった。文法テストは50点（満点60点）以上が日本語能力試験のN2レベルに相当し、聴解テストは9点（満点18点）以上が、読解テストは20点（満点38点）以上がN2に相当する難易度になっている。

2.2. テスト内容

文法テストは、初級から中級入門にかけて指導される、助詞、活用、アスペクト、テンス、複文、自他動詞などが問題項目化されている。以下、文法テストの例を示す。な

お、漢字にはすべてルビが振ってある。

問1) せんしゅう ぜんぜん テレビを_____。

①みます ②みません ③みました ④みませんでした

しゃかい こうれい か にほんじん おお もんだい

問2) 社会の高齢化は日本人_____、大きな問題です。

①に対(たい)して ②のために ③にとって ④によって

せんせい ろんぶん

問3) 先生、この論文を_____のですが。

①拝見(はいけん)したい ②ご覧(らん)になりたい

③見(み)たい ④見(み)られたい

聴解テストは、全18問で、前半9問はテープを聴いて、絵や図等を見て、内容に合ったものを選択する形式の問題である。後半9問はテープを聴いた後に、音声による質問に解答する形式の問題である。トピックの例としては、「留守番電話のメッセージ」「アンケートの答え」「配達屋に苦情の電話を言う」「野球選手になったわけ」「天文学についての講義」「子供手当について」などがある。

読解テストは、読解文に対して、幾つかの設問が用意されており、全部で38問で構成されている。読解問題の例を以下に示す。なお、漢字には初級前半で学ばれる150字以外にはルビが振ってある。

1. 次の文を読んで、問に答えなさい。

きょねん なつ りょこう ともだち たなか きむら
 去年の夏、タイへ旅行に行きました。タイでは友達ともだちの田中さんたなかと木村さんきむらといっしょになりました。

つ つぎ きむら てら みやげ
 た。着いた次の日は、木村さんきむらと古いお寺てらを見て、お土産みやげやへ行って、それから、デパートへ行きました。私はそこで、小さいかばんたなか うみを買いました。2日目は田中さんたなかと海へ行きました。くもりでしたがマリンスポーツあそをして遊びました。つぎ よる きむら
 次の日の夜、木村さんきむらが日本へ帰るので田中さんたなかと空港くうこうまで送りました。そして空港くうこうのそばそばのレストランでみんなばんで晩ごはんを食べました。りょうり から きむら
 料理りょうりが辛からすぎて、私はあまり食きむらべられませんでした。木村さんきむらはもう少し長ながくいたかったと言いっていました。

www.kci.go.kr

問 1) 私がかばんを買ったのはどこですか。

- てら みやげ うみ
 ①お寺 ②お土産や ③海 ④デパート

各テストのクロンバックの α 信頼度係数は、文法テスト $\alpha=.937(N=60)$ 、聴解テスト $\alpha=.730(N=18)$ 、読解テスト $\alpha=.849(N=38)$ となり、どれも高い信頼度を示した。

2.3. 被験者のレベル分け

文法テスト ($M=39.05$ 、 $SD=12.256$) の平均点+標準偏差1 (51.31点以上) を上位、平均点-標準偏差1 (26.79点以下) を下位、平均点 \pm 標準偏差1の範囲を中位と認定した。その結果、下位群37名、中位群129名、上位群26名を抽出した。図1のヒストグラムの縦軸は度数 (人数) を、横軸は得点 (60点満点) を表している。

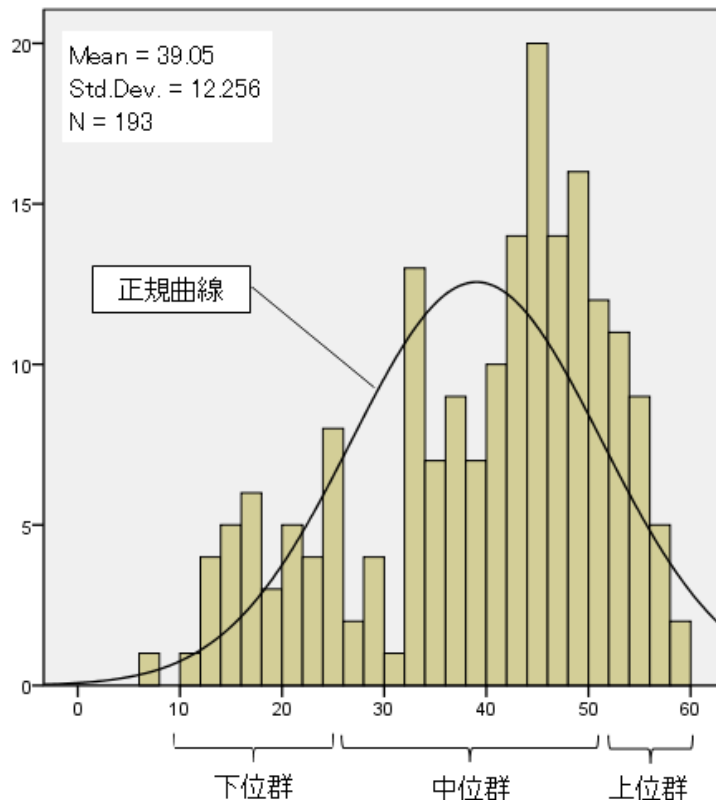


図1 文法テストによるレベル分け

そして、各群の中に非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の3グループを設け、母語別のグループを因子として、読解テスト、聴解テストの得点を一元配置の分散分析によって比較し、分析を行った。

3. 調査結果

3.1. 下位群における文法と読解の関係

下位群の中で、非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の間に各テストの得点に差があるのかを、一元配置の分散分析(One way ANOVA)によって、検討した。その結果を表1に展開する¹⁾。

表1 下位群の非漢字圏、準漢字圏、漢字圏別による各テストの平均の検定

	文法		聴解		読解		
	M	SD	M	SD	M	SD	
非漢字圏(<i>n</i> =15)	16.33	4.17	4.93	2.05	8.67	1.15	
準漢字圏(<i>n</i> =2)	20.00	4.24	6.00	.00	9.50	2.50	
漢字圏(<i>n</i> =20)	20.10	4.70	6.05	2.24	13.75	1.22	
F値	ns		ns		*		
シェフェの多重比較						非漢字圏<漢字圏	

注: *. $p < .05$, **. $p < .01$, ***. $p < .001$

下位群37名の文法テスト[F(2,34)=3.143, $p = .056$, ns]、聴解テスト[F(2,34)=1.219, $p = .308$, ns]は主効果が有意ではなかった。一方、読解テストは[F(2,34)=4.562, $p < .05$]となり、主効果が有意だった。この結果は、文法テストと聴解テストは非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の3グループの間で差がなかったことを示している。読解テストにおいては、主効果が有意であったため、各グループ間の平均点の比較をシェフェの多重比較によって検討を行った。その結果、非漢字圏 (M=8.67、SD=1.15) と準漢

¹⁾ 図1において、文法テストの得点の標準偏差によって下位群、中位群、上位群にグループ分けを行っており、文法テストの得点で均一化されている。そのため、当然、表1から表3の分散分析では、3群間に有意差は出ない。ここでは、非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の要素を独立変数として、従属変数である文法テスト、聴解テスト、読解テストの3種のテストの間に得点差が現れるかどうかを示すために、文法テストの平均値の比較 (F値) も表1から表3に盛り込んであることを断っておく。

字圏 (M=9.50、SD=2.50) の間には有意差がなく、また、準漢字圏と漢字圏 (M=13.75、SD=1.22) の間にも有意差が見られなかったが、非漢字圏と漢字圏の間には有意差が見られた。

3.2. 中位群における文法と読解の関係

次に、中位群の中で、非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の間に各テストの得点の差が見られるかを一元配置の分散分析で検討した。この結果を表 2 に展開した。

表 2 中位群の非漢字圏、準漢字圏、漢字圏別による各テストの平均の検定

	文法		聴解		読解		
	M	SD	M	SD	M	SD	
非漢字圏 (n=24)	41.75	5.77	8.38	2.41	16.50	6.28	
準漢字圏 (n=10)	43.90	7.39	11.20	4.16	20.40	7.04	
漢字圏 (n=95)	41.49	6.45	8.81	3.35	21.57	5.12	
F値	ns		ns		***		
シェフェの多重比較						非漢字圏<漢字圏	

注: *.p<.05,**p<.01,***p<.001

その結果、中位群129名の文法テスト[F(2,126)=.639,p=.530,ns]、聴解テスト[F(2,126)=2.824,p=.063,ns]は、下位群と同様に、やはり主効果が有意ではなかった。一方、読解テストは[F(2,126)=8.121,p<.001]となり、下位群と同様に主効果が有意だった。主効果が有意であったため、シェフェの多重比較による検討を行ったところ、下位群と同じく、非漢字圏 (M=16.50、SD=6.28) と準漢字圏 (M=20.40、SD=7.04) の間には有意差がなく、準漢字圏と漢字圏 (M=21.57、SD=5.12) の間にも有意差が見られなかったが、非漢字圏と漢字圏の間には有意差が見られた。

3.3. 上位群における文法と読解の関係

最後に上位群の中で、非漢字圏、準漢字圏、漢字圏の間に各テストの得点に差があるのかを一元配置の分散分析で検討した。その結果を、表 3 に展開した。

表3 上位群の非漢字圏、準漢字圏、漢字圏別による各テストの平均の検定

	文法		聴解		読解	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
非漢字圏 (<i>n</i> =6)	54.33	2.88	13.33	1.03	20.00	6.33
準漢字圏 (<i>n</i> =7)	53.29	1.11	12.00	2.94	25.29	4.65
漢字圏 (<i>n</i> =14)	54.79	1.63	12.50	2.96	26.07	4.16
<i>F</i> 値	<i>ns</i>		<i>ns</i>		*	
シェフェの多重比較					非漢字圏<漢字圏	

注: *. $p<.05$,** $p<.01$,*** $p<.001$

上位群26名の文法テスト[$F(2,24)=1.517, p=.260, ns$]、聴解テスト[$F(2,24)=.410, p=.668, ns$]はやはり主効果が有意ではなかった。一方、読解テストは[$F(2,24)=3.472, p<.05$]となり、主効果が有意だった。主効果が有意であったため、シェフェの多重比較による検討を行ったところ、非漢字圏 ($M=20.00, SD=6.33$) と準漢字圏 ($M=25.29, SD=4.65$) の間には有意差がなく、また、準漢字圏と漢字圏 ($M=26.07, SD=4.16$) の間にも有意差が見られなかったが、非漢字圏と漢字圏の間には有意差が見られた。

以上の結果、漢字圏学習者は他の非漢字圏学習者や準漢字圏学習者との間で、文法の得点に差がない場合、読解テストで有意に得点が高くなる現象が観察された。また、準漢字圏学習者は非漢字圏学習者と漢字圏学習者の中間に位置していた。そして、文法テストが同レベルに統制されている場合、どの学習者も共に聴解テストの得点に差が見られなかった。即ち、漢字圏学習者の読解は視覚情報に偏ったものであり、聴解テストでは他の母語話者と比べても特に有利にはならなかった。このことから漢字圏学習者は文章読解において視覚的な漢字による情報を中心に有利に読解を進めていたということが上記の結果から観察された。

4. 各読解文の項目分析

4.1. 読解テスト全体の検討

それでは、読解テストにおいて有意差の見られた非漢字圏学習者と漢字圏学習者の間でどの読解文で差が見られたのか、独立したサンプルのt検定(Independent t test)によって平均点を比較した。この結果を表4に示した。

表4 非漢字圏と漢字圏の読解文の得点差 (t 検定)

	下位群				t 値	中位群				t 値	上位群				t 値
	非漢字圏		漢字圏			非漢字圏		漢字圏			非漢字圏		漢字圏		
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
読解1	.20	.414	.60	.503	**	.83	.381	.88	.322	ns	1.00	.000	1.00	.000	-
読解2	.27	.458	.60	.503	ns	.96	.204	.91	.294	ns	1.00	.000	1.00	.000	-
読解3	.20	.414	.60	.503	**	.83	.381	.85	.356	ns	1.00	.000	.86	.363	ns
読解4	.13	.352	.20	.410	ns	.75	.442	.68	.467	ns	.83	.408	.93	.267	ns
読解5	.07	.258	.35	.489	*	.33	.482	.68	.467	***	.83	.408	.93	.267	ns
読解6	.27	.458	.45	.510	ns	.67	.482	.77	.424	ns	.83	.408	.86	.363	ns
読解7	.33	.488	.30	.470	ns	.67	.482	.82	.385	ns	.67	.516	.79	.426	ns
読解8	.20	.414	.30	.470	ns	.58	.504	.58	.496	ns	.83	.408	.71	.469	ns
読解9	.40	.507	.45	.510	ns	.67	.482	.72	.453	ns	1.00	.000	.64	.497	ns
読解10	.13	.352	.50	.513	**	.67	.482	.87	.334	ns	.83	.408	1.00	.000	ns
読解11	.27	.458	.00	.000	ns	.33	.482	.29	.458	ns	.67	.516	.50	.519	ns
読解12	.13	.352	.15	.366	ns	.13	.338	.38	.488	ns	.17	.408	.57	.514	ns
読解13	.27	.458	.00	.000	ns	.50	.511	.61	.490	ns	.83	.408	.93	.267	ns
読解14	.00	.000	.30	.470	**	.38	.495	.43	.498	ns	.17	.408	.64	.497	ns
読解15	.47	.516	.40	.503	ns	.58	.504	.76	.431	ns	1.00	.000	1.00	.000	-
読解16	.40	.507	.40	.503	ns	.29	.464	.35	.479	ns	.50	.548	.64	.497	ns
読解17	.40	.507	.40	.503	ns	.46	.509	.54	.501	ns	.50	.548	.64	.497	ns
読解18	.13	.352	.45	.510	*	.46	.509	.76	.431	**	1.00	.000	1.00	.000	-
読解19	.07	.258	.50	.513	***	.50	.511	.67	.471	ns	.83	.408	.86	.363	ns
読解20	.27	.458	.25	.444	ns	.33	.482	.26	.443	ns	.67	.516	.36	.497	ns
読解21	.27	.458	.30	.470	ns	.42	.504	.35	.479	ns	.50	.548	.79	.426	ns
読解22	.07	.258	.20	.410	ns	.25	.442	.28	.453	ns	.50	.548	.21	.426	ns
読解23	.40	.507	.15	.366	ns	.38	.495	.61	.490	**	.33	.516	1.00	.000	*
読解24	.40	.507	.30	.470	ns	.25	.442	.14	.346	ns	.33	.516	.29	.469	ns
読解25	.13	.352	.40	.503	ns	.29	.464	.64	.482	***	.50	.548	.93	.267	ns
読解26	.47	.516	.25	.444	ns	.38	.495	.53	.502	ns	.33	.516	.79	.426	ns
読解27	.33	.488	.30	.470	ns	.33	.482	.60	.492	**	.17	.408	.71	.469	*
読解28	.07	.258	.30	.470	ns	.29	.464	.55	.500	**	.17	.408	.50	.519	ns
読解29	.27	.458	.50	.513	ns	.50	.511	.63	.485	ns	.50	.548	.57	.514	ns
読解30	.27	.458	.35	.489	ns	.42	.504	.56	.499	ns	.17	.408	.71	.469	*
読解31	.20	.414	.50	.513	ns	.29	.464	.71	.458	***	.33	.516	.71	.469	ns
読解32	.20	.414	.75	.444	***	.38	.495	.72	.453	***	.33	.516	.57	.514	ns
読解33	.13	.352	.50	.513	**	.33	.482	.75	.437	***	.33	.516	.64	.497	ns
読解34	.20	.414	.40	.503	ns	.21	.415	.28	.453	ns	.17	.408	.36	.497	ns
読解35	.20	.414	.35	.489	ns	.38	.495	.44	.499	ns	.17	.408	.43	.514	ns
読解36	.07	.258	.15	.366	ns	.17	.381	.17	.376	ns	.00	.000	.07	.267	ns
読解37	.20	.414	.20	.410	ns	.13	.338	.45	.500	***	.00	.000	.57	.514	***
読解38	.20	.414	.10	.308	ns	.21	.415	.35	.479	ns	.00	.000	.36	.497	**

注: *. $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

読解問題38問の各項目は、下位群では9問（問題番号1、3、5、10、14、18、19、32、33）、中位群では10問（問題番号5、18、23、25、27、28、31、32、33、37）、上位群では5問（問題番号23、27、30、37、38）で有意差が見られ、いずれも

漢字圏の方が正答率が有意に高かった。非漢字圏学習者の方が得点が高いという問題は1問もなかった。従って、漢字圏学習者の得点が高かった項目を以下で検討して行く。

4.2. 項目の検討

4.2.1 分析の視点

読解テストは全12題（問題数38問）で、テキストは短いもので300字程度、一番長いもので900字程度である。また、テキストのジャンルは、日記・説明文・エッセイ・論説文である。

設問の解答形式はすべて四肢選択形式であり、設問形式は、「空所補充」、「指示詞の内容を問うもの」、「下線部の意味を問うもの」、「筆者の主張を問うもの」に大きく分けられる。

スカーセラ・オックスフォード（1997）によれば、第二言語のリーディング能力の要素には、「文法能力」、「社会言語学的能力」、「談話能力」、「方略的能力」があると言われている。このうち、「方略的能力」に関して、漢字圏学習者が「漢字から意味を推測する」というのも、日本語テキストの読解を進める上での1つの戦略として考えられる。

そこで次節では、多肢選択式の読解テストで、意味のわかる漢字・語彙を手掛かりに、母語の漢字語彙知識を使用するという戦略を用いながら、漢字圏学習者がどのように解答を導き出しているのか、その可能性を探る。どのように解答を導き出しているか、実際に漢字圏学習者が解答を導くまでのプロセスを追うべきではあるが、今回の分析では、中国語の学習歴があり、且つ、読解テストの問題作成者ではない2名の日本語教師による分析を通して、解答を導き出すまでのプロセスについての考察を行った。

4.2.2 漢字圏学習者の方が得点が高かった問題

漢字圏学習者と非漢字圏学習者で差が見られた問題を具体的にに取り上げ、解答のプロセスを検討する。差が見られた17問のうち7問は、「空所補充形式」であり、且つ、「選択肢が語または易しい単文」という特徴があった。以下、本文のテキストを抜粋し、問題例を示す。

例1)

大西洋にすむヨーロッパ^への動物も減^{ぜつめつ}っていて、絶滅^{しんばい}が心配されるため、二〇〇九年三月にはワシントン条約^{じょうやく}で国際的な取引^{こくさいでき とりひき}に（ ① ）。

問19. （ ① ）にはどんなことばが入りますか。

1. 新しい制限^{せいせい}ができました
2. 変^かることになりました
3. 日本も参加^{さんか}しました
4. 発展^{はってん}していきました

正答：1

選択肢はいずれも単文であり、「制限」「変わる」「参加」「発展」などの漢字語彙を含むことから、漢字圏学習者であれば下位群でも意味を推測できる選択肢だと考えられる。この設問は、①と同一文中にある「減って／絶滅／心配／ワシントン条約」などの漢字語彙を手がかりに1文の文意を推測することにより、正答を導くことができる。①の直前の「取引」は中国語にはない語で、上級の漢字圏学習者にとっても意味の予測の難しい語だが、ここでは無視しても解答には差し支えない。

例2)

もちろん、それは（ ③ ）からの許^{ゆる}された逸脱^{いつだつ}である。

問32. （ ③ ）に入る最^{てきとう}（もっと）も適^{てきとう}当なことばはどれか。

1. 刺激^{しげき}
2. 制度^{せいど}
3. 外側^{そとがわ}
4. 欲望^{よくぼう}

正答：2

問題32は、例1と同じタイプの問題で、選択肢の中の漢語と、同一文中にある「逸脱」という漢語との組み合わせを考えるだけでも正答できる可能性がある。しかし、本文のテキスト全体に散らばっている「社会」「制度」「秩序」などのキーワードを見つけ、主要なトピックを把握することで、より確実に他の選択肢を排除できる。この問題は、それまでの複数段落を読み「衣服は秩序と結びついているが、特別な場面では秩序からの離脱が瞬間的に行われる」という論旨を把握した上で正答が選択されることが理想的である。しか

し、漢字語彙を手がかりにするという方略を用いた場合、論旨が理解できなくても、大まかな主題が把握できるため、正答にたどりつきやすい問題だと言えるだろう。

以上、2つの空所補充問題を例にあげ、漢字圏学習者が解答を導くストラテジーについて検討した。分析の結果、漢字語彙を手がかりに語彙レベルで答えを導いている可能性があるということが確認された。前述の鴻巣他（1999）では読解において漢字を注視するという情報処理が見られたが、これはテキストやタスクがどのようなタイプであっても行われるものと予測される。漢字に注目するというストラテジーは、多肢選択式の読解テストにおいては、正答にたどりつくための方略として特に大きく効果を発揮し、非漢字圏学習者との得点差が発生するのではないだろうか。また、堀場他（2008）は、統語的知識や文化社会的知識の影響の少ない語彙テストの場合、漢字圏学習者が母語知識に基づいた語認識ストラテジーを使用し正答を得るケースが多いのではないかと述べている。このことから、読解テストにおいては、漢字圏学習者の母語知識ができるだけ得点に反映しないよう、設問の形式にも十分配慮しなければならないという課題が浮かび上がる。今回は数の多かった空所補充形式だけを取り上げ分析したが、他の設問形式ではどのように処理しているのか、分析方法を含め、今後検討する必要がある。

5. 総括

本調査において、漢字圏と非漢字圏及び準漢字圏の学習者間では、文法テストの得点が同じであれば、聴解テストの得点は等しくなるが、読解テストは漢字圏学習者が実際の文法テストの得点以上に有意に高くなる現象を観察した。この結果を受けて、漢字圏学習者と非漢字圏学習者の読解テストの得点に有意差があった読解問題について検討を行ったところ、多肢選択式の読解テストで、漢字圏学習者が漢字語彙を手がかりに語彙レベルで答えを導いている可能性があるということが示唆された。以上の結果は、読解問題とは何か、という大きな命題に行き着く。即ち、読解問題作成にあたって、漢字語彙をキーワードにしたコロケーションによって局所的なレベルで解決されるようなタイプの設問や、設問に当たるテキストの部分的な箇所を理解さえあれば解答できる読解問題は本来、学習者の読解能力を測る設問ではなく、学習者の語彙能力を測る類いのものである。今回の調査によって、漢字圏学習者のみが読解テストの得点が有意に高かった現象からも、漢字語彙の能力によってこれらの設問を解決している様子が観察されたが、内容の理解や文章の展開など、本来の「読解とは何か」という問いかけを再度考慮し、読解テスト作成の方法論の構築を進めて行きたい。

【参考文献】

- 伊東祐郎 (2008) 『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』 アルク
- 伊東祐郎・横田淳子・福岡理恵子・高野愛子 (2009) 「アカデミック・ジャパニーズにおける読解力—二つの読解試験分析を通して—」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 35, pp.31-46.
- 加納千恵子、大神智春、清水百合、郭俊海、石井奈保美、谷部弘子、石井 恵理子 (2011) 『日本語教育業書つくる 漢字教材をつくる』 スリーエーネットワーク
- 鴻巣努・重松淳・鈴木美加・福田忠彦 (1999) 「第二言語としての日本語読解における視覚情報処理に関する人間工学的研究」 『人間工学』 vol.35、No.3、 日本人間工学会 pp.135-144.
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2004) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』 凡人社
- 小森和子 (2010) 『中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理過程』 風間書房
- 堀場裕紀江・小林ひとみ・松本順子・鈴木秀明 (2008) 「第 2 言語学習者の語彙知識と読解における母語背景の影響」 『言語科学研究第14号』 神田外国語大学 pp.27-48.
- Scarcella, Robin, C. and Oxford, Rebecca, L. (1992) *The Tapestry of Language Learning*. Heinle & Heinle Publishers. (牧野高吉訳・監修 (1997) 『第 2 言語習得の理論と実践』 松柏社)

要 旨

日本語学習者はその母語の漢字能力によって、漢字圏学習者、準漢字圏学習者、非漢字圏学習者の3種に大別される。このうち、漢字圏学習者は、他の非漢字圏学習者に比べて、その日本語の実力以上に有利に読解を進めているのではないかという予測が立てられる。この検証のために、日本国内で日本語を学習する193名の被験者に対して、文法テスト(N=60)、聴解テスト(N=18)、読解テスト(N=38)の3種のテストを与え、その得点の比較から、読解における諸問題を考察した。文法テストの得点を漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の別に標準偏差 ± 1 の範囲で下位群、中位群、上位群に分け、各群の文法テストと聴解テストと読解テストの得点差を一元配置の分散分析で検証した。その結果、文法テストの得点に対して、聴解テストの得点は等しく、漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の間に差はなかったが、読解テストにおいてはその得点が漢字圏の学習者のみが、非漢字圏に比べて有意に高いという現象が観察された。この結果を受けて、非漢字圏と漢字圏の学習者の読解テスト38問の各問題の得点をt検定によって比較し、差がみられた問題の項目分析を行った。その結果、多肢選択式の読解テストで、漢字語彙をキーワードにしたコロケーションによって局所的なレベルで解決されるようなタイプの設問や、設問に当たるテキストの部分的な箇所を理解さえあれば解答できる問題で有意に得点が高くなっており、漢字圏学習者が漢字語彙を手がかりに語彙レベルで読解問題の答えを導いている可能性があるということが示唆された。

キーワード：読解、漢字圏学習者、準漢字圏学習者、非漢字圏学習者、
分散分析、t検定、項目分析

투 고 : 2012. 5. 31
1차 심사 : 2012. 6. 16
2차 심사 : 2012. 7. 7